

これからが正念場

——住民投票で「ノー」を示した岩国から——

大川 清

昨夜からの強い雨も昼前には上がり、絶好の選挙日和。天気も味方してくれているかのようだ。この一カ月、できることは何でもしてきた。できる限りのことをしてきた。あとは街の人びとを信じるだけ。祈るような気持ちだ。

三月一二日、厚木基地からの空母艦載機部隊移駐案受け入れの賛否を問う住民投票が岩国市において実施され、五八・六八％の投票率で住民投票は成立し、四三、四三三票、実に八七・四％（全有権者の過半数）もの圧倒的多数の反対意見で、空母艦載機部隊移駐案受け入れに私たちが岩国市民は、はっきりと「ノー」の意思を示した。

戦後六〇年間、岩国市民は絶えず騒音被害に苦しめられ、米兵の犯罪に脅かされながら暮らしてきた。けれどさまざまなしがらみの中で、基地をめぐる議論はタブー視され、基地との共存を強いられてきた。そんな中で圧倒的多数の反対の意思表示は、「もう我慢できない」との市民の力一杯の抵抗であったと思う。今回の住民投票を通じて市民が基地につ

て、自分たちの街の未来について真剣に考え出したことの意義は本当に大きなことだと思う。

◎住民投票に至る経緯◎

一昨年夏、突如として厚木基地からの空母艦載機部隊移駐計画案が報道された。商工会や経済界では受け入れを歓迎する声も一部にあったが、私たち市民は一貫してそのことに反対し続けてきた。昨年六月には市議会でも反対決議がなされ、九月には市民六万人の反対署名も提出され、市長も一貫して白紙撤回の立場を貫いてきた。少なくとも昨年秋までは、市民、議会、首長こそ反対の姿勢を貫いていたはずであったが、昨年末あたりから少し様子が違ってきた。

市議会議長を中心に一部の議員の間からは「反対、反対と言っていたら振興策が得られなくなる」という声が上がりが始め、年明けには条件闘争を求める声が顕著となり、果ては「お上の言うことに盾突いても」と時代錯誤も甚だしい発言まで飛び交い、市長と議会の意見は徐々に

乖離^{かいり}してきた。条件闘争を議論む議員からは議会軽視（それこそ市民軽視だと言いたい）だとの反発もあったが、二月七日に市長が住民投票を發議した。

◎住民投票を成功させる会の発足◎

市長の發議を聞き、住民投票は私たち岩国市民の意思を直接示すことのできる大きなチャンスだと素直に喜んだ。しかし次の瞬間、「市民の中には、反対だけれど国の言うことだから仕方がないと半ば諦めている人たちも大勢いる。このままもし黙って何もせずに投票日を迎えてしまうと、投票率が五〇％を切ってしまうかもしれない」という危惧が頭をよぎった。岩国市の住民投票条例の中には「五〇％条項」があり、投票率が五〇％に達しなければ無効となり、開票もされないというのだ。

何としても五〇％以上の投票率で住民投票を成立させたい、移駐計画反対の市民の意思を絶対に国に届けたい、国からの一方的な押しつけではなくて、私たちの街の将来は、そこに住む私たち自身が決めたいと強く思わされた。

そんな同じ思いをもった者が集まって、矢も盾もたまたぬ思いで翌二月八日、九人のメンバーで「住民投票を成立させる会」を發足した。

◎できることは何でもやっつけていこう◎

それから一カ月余り、じっくり考えて行動を起こすというより、行動しながら考えたというのが正直なところだ。毎晩、遅くまで「どうしよう、こうしよう」と話しながら、すべてが手探りで綱渡りのような状況であった。ただただ悔いの残らないように、できることは何でもやっつけていこうと思った。

幸い私たちの呼びかけに応え、毎日のように近県の方がたが応援に駆け付けて下さり、全国各地からカンパや応援メッセージが届き、私たち岩国市民はどれほど勇気づけられ、励まされたことかしかない。

雨の日も雪の日も、ひたすら投票を呼びかけるビラを配り続けた。八四歳のおばあちゃんは、子や孫のことを思うとじつとしておれないと毎日毎日ビラを配り続けて下さった。プラカードを首に下げ、駅前立ちビラ配りを続けた。何としても五〇%以上の投票率と圧倒的多数の反対意見で、私たち市民をまったく無視した無謀な移駐計画案を白紙撤回させたいとの一心であった。

住民投票に反対し、棄権を呼びかける運動や、基地拡張の見返り振興策を求める声も根強くある。けれどこれまで岩国は基地で潤ってきたであろうか。基地で

街は決して豊かにはならない。むしろ更なる騒音被害、米兵の犯罪によって、ますます住みにくい街になってしまおう。

三月五日には「3・21GO!」一五〇〇人の人文字、投票日前日には四〇〇〇人の市民大集会和、少しづつ手応えも感じてきた。「安心や命と引き換えの振興策なら御免だ!」「騒音や犯罪に苦しめられずに安心して暮らせる街を子や孫に!」という心からなる訴え、叫びが通じた。住民投票はみごと大成功。はつきりと「ノー」の意思が示された。

さあ、この民意を国に届けよう。国の政治家はアメリカの顔色ではなく、私たち国民の、市民の声に耳を傾けて政治を行なうべきだ。ラムズフェルド米国防長官は「歓迎されないとところに基地は置かない」と明言した。私たち市民は、もちろん基地を歓迎しない。

◎これからが正念場◎

政府は、地元住民の意思にかかわらず日米合意を優先させるとの見解を発表したが、地元住民の苦悩をまったく無視し、民主主義を根幹から否定するものとして、私たち住民は絶対にこれを許すわけにはいかない。今後、政府は住民投票の結果を矮小化し、閉塞状況に追いやるようにしてくると思う。住民投票を機にその後の粘り強い運動で辺野古沖の海上基地建設

案を国に諦めさせた沖縄の人たち、騒音のたらい回しは断固反対と言って下さる厚木の人たち、全国各地の人たちと連帯しながら私たちも粘り強く闘っていきたいと思う。

近く「住民投票の結果を實現させる会」を発足させる予定だ。まさに民主主義、主権在民の実が問われている。これからが正念場、今後とも、皆さまのご支援とご協力をどうかよろしく願います。(おおかわ・きよし、住民投票を成功させる会・共同代表、日本基督教団牧師)

〔平良修「辺野古」17ページ下段より〕

場ではない、反戦運動の場でもない、基地建設阻止行動の場なのだと自覚し、野獸的暴力によってではなく、非暴力行動によって人間共生を創出する場なのだとなつた。個々人の群れによる行動だった。真なるものに目覚めた個々人の団結に日米両政府は敗退させられた。しなやかにしぶといこの平和の群れは、軍事力信仰の国家権力について打ち勝つことができたのである。

しかし、最初の予定地を断念させられた日米両政府は、場所を変えて、建設の強行をしようと目論んでいる。非暴力直接徹底抵抗は次の勝利を求めて、なお続くことになる。

(たいら・おさむ、沖縄、牧師)